

和泉式部の『燈の前に花を思ふ』と云ふ心』の歌三首をめぐって

金子紀子

一 はじめに

本稿では和泉式部の桜の歌のうち、次の『燈の前に花を思ふ』と云ふ心』歌三首をとりあげ考察したい。

『燈の前に花を思ふ』と云ふ心

461 夜のほどに散りもこそすれ明くるまで火影に花を見るよし

もがな

462 火にあてて見るべきものを桜花幾日もあらで散るぞ悲しき

463 ともしびの風にたゆたふ見るまに飽かで散りなん花をこそ

そ見れ

当該歌の詞書の「燈」「前」「花」「思」は榊原本・村田春海本ともに漢字表記であり、そこに題詠意識が窺える。「と云ふ心」が付された形で、全体として、漢字四字題の題詠と思われる詞書となっている。^{注1}

桜を詠む歌は古来が多いが、ほとんどが昼間の桜を歌うもので、遙かに山桜を望み、野山に花見に行き、または庭の桜を愛でて、散るのを惜しむ歌である。^{注2}ところが当該三首では、「燈の前」、すなわち夜に室内で花（桜）を思う心を歌っている。こうした桜の詠い方は、勅撰集には見られず、後述のように非常に新奇な発想である。この斬新な詠い方には、当然のことながら「燈前思花」という題が関連しているよう。そもそも漢字四字題を詠むこと自体、平安半ばの女流歌人の営為として注目に値するが、それに加えて「燈前思花」という題も珍しい。和泉式部集（岩波文庫の脚注）には「出典未詳」とあり、『平安朝漢文学総合索引』^{注3}にも、見当たらない。『白氏文集』『礼記』『史記』『文選』『玉臺新詠』など、日本の漢詩漢文では『日本書紀』『菅家文章』『田氏家集』等、『和漢朗詠集』『千載佳句』に再録される著名な漢籍に、管見の限り「燈前思花」の詩句を見出すことはできない。「燈前思花」は既存の漢籍

の詩句に拠らない、新作の漢字四字題であるらしい。

和泉式部は、新作の漢字四字題を詠む文学環境と、どのように繋がっていたのだろうか。「燈前思花」の「題の心」とはどのようなものか。そして当該三首はその「題の心」をどのように詠み得ているのか。同時代までに例のない題に導かれ、類を見ない発想で桜を詠む当該三首を通じ、和泉式部という歌人について考察していきたい。

二 漢字四字題の創作

『紀師匠曲水宴和歌』^{注4}では、新作の漢字題が出されているが、既に歌会においては、既存の詩句に拠らない漢字三、四文字の題が出されていたという。^{注5}

和泉式部が歌会や歌合、あるいは詩会と接する機会としては、帥宮敦道親王周辺と花山院歌壇が考えられる。既に指摘があるように、^{注6}和泉式部集には、河原院に集って歌を詠んでいた源道濟、大江嘉言、源兼澄らや、花山院歌壇に属していた道明阿闍梨、藤原長能らと、詠作の場（屏風歌、歌合、歌会）を同じくするらしい歌がある。^{注7}特に、兼作歌人として活躍していた道濟とは、直接歌を交わしていたことが、^{注8}歌集相互に確認できる。

題を詠むという行為に注目すると、和泉式部が源兼澄、大江嘉

言、藤原長能らと、完全な一致ではないが、同じような題で歌を詠んでいることが知られている。すなわち和泉式部集の809〜811番の詞書に、「暗き夜、ほととぎす待つ心」「橘の下にて」「ほととぎすの声を、山辺に尋ねにいくを聞きて」とあるのに対して、『源兼澄集』^{注9}の25〜27番の詞書には、「庭なる橘のもとに時鳥の声待つころ」「暗き夜、待つころ」「また、ほととぎすを聞きに行く心を」とあり、さらに『大江嘉言集』92〜93番に、「ほととぎす、たちばなのもとにてまつ」「くらき夜まつ」とある。この三者の詞書に題詠という明示はないが、和泉式部と兼澄の詞書の「心」から、題詠と判断して良いだろう。また『長能集』^{注10}19の詞書には、「かたふ人のもとに、五月のころほひいきたるに、くらきよに郭公を待つといふ題を、よますれば」とあり、和泉式部集の809番の「暗き夜、ほととぎす待つ」と同趣の題を賜って歌を詠んでいたことが知られる。

また和泉式部集には、当該歌以外にも、新作の漢字題を詠んだらしい歌がある。

○『和泉式部集』

「花の時心不^ふ静^{しず}、雨の中松緑を増す」といふ心を、人のよむに

459 のどかなる折こそなけれ花を思ふ心のうちに風は吹かねど

400 松はそのものと色だにあるものをすべて緑も春は異り

岩波文庫が脚注で、同じく漢詩の典拠不明とするこの題の場合、源道済、大江嘉言も似た題で二首ずつ詠んでいることが、すでに指摘されている。^{注11}

○『源道済集』（以下本論文引用の道済の歌は注[∞]による）。

三月五日、中宮大夫、法住寺にて人々詠みし。二首。

春残花

264 山隠れ残れる花を見つるかな世に吹き出だす風にたづねて

雨中小松

265 春雨に生ふる小松の梢にぞ君が来てみむほどは知らるる

○『大江嘉言集』

花心しつかならず

114 さかぬよにちるまで花につけたれば春の心のそらに有るかな

はるのこまつ、みどりをます

115 千代まではかはらざるべき松なれどはるはみどりのふかく

ぞ有りける

『道済集』のみ「春残花」と違う題もあるが、この題も出ていたものか、中宮大夫（藤原齊信）らが法住寺で詠んだとするこの

歌だけ時期が違うのか、詳細は不明である。この他は微妙な違いはあれ、ほぼ同じ題であることから、和泉式部集459、460番の詞書にいう「人のよむに」の「人」として道済と嘉言も参加したことは確かであろう。なお和泉式部集では、「燈前思花」の三首（461、463番）の直前が、この歌となっている。

さて、この道済、嘉言、兼澄の三人については、敦道親王のものと題を下賜され、歌を詠んだ例が確認できる。たとえば『兼澄集』の1の詞書には、「そちの宮にて三月十日よひばかりに人々うたよませたまふに、はなを見てにはをはらずといふだいをたまはりて」とあり、敦道親王は『白氏文集』の「惜花不掃地」^{注12}を題として出し、人々に句題和歌を詠ませている。『大江嘉言集』の95番の「花をみむとてにはをはらず」も、この時の歌であろう。また、後拾遺集の次の歌も、この句題との関連があるだろうか。

庭の桜の多く散りて侍りければよめる 和泉式部

148 風だにも吹きはらはずは庭桜散るとも春のほどは見てまし

詞書によればただの叙景歌のようだが、歌意からみて、「惜花不掃地」^{注13}との関連が考えられる。あるいは和泉式部自身は題を賜る立場になかったが、敦道親王周辺の営為を見聞きしたことで、私にこの歌を詠んだものであろうか。

この他、道済も敦道親王に従って、詩会に出詠していたことが

知られている。また拾遺集¹⁰³の詞書では「帥の親王、人々」に歌詠ませ侍りけるに」とあり、嘉言の歌が入集している。兼澄、嘉言、道濟は、敦道親王のもとでの詩会や歌会に連なっていたことが知られ、和泉式部が彼らと題を同じくする歌を残しているのは、敦道親王との関連が推察されよう。

また花山院歌壇の歌人である長能、道明阿闍梨は、それぞれの歌集に、花山院の歌会にて題を賜り詠んだとする歌が残されている。^{注15}

『大江嘉言集』にも同様の歌があり、嘉言も花山院の周辺に入りしていたことが知られる。なかでも『道明阿闍梨集』の22番の詞書には、「月前に花をおもふといふ題を、花山院よませ給ひしに」とあり、花山院が「月前思花」と覚しき題を詠ましていることが注目される（次節で詳しく検討する）。そして和泉式部集には花山院歌合に出詠した歌が残されており、花山院歌壇とも、敦道親王を通じてであろうか、交流があったようである。^{注16}

敦道親王の召人であつた和泉式部は、親王の周辺や花山院歌壇で催される歌会や歌合、詩会などに接し、題を賜り歌を詠む宮為を享受しうる環境にいた（和泉式部集42番）。ところがこの「燈前思花」題については、道済らゆかりの深い歌人の歌集に確認できず、『平安和歌歌題索引』^{注17}にも、他に見当たらない。歌合や歌会で

出された新作の漢字四字題だったのだろうが、実際には出されなかった、あるいは出されても、詠歌が家集に残らなかった題であるようだ。そうした珍しい題に関心を寄せ、複数の歌を詠んだという点に、和泉式部の個性が窺えるのではなからうか。

三「燈前思花」の題意

この桜の歌三首は、先行研究^{注18}において、『白氏文集』の詩「惜牡丹花二」との関連が指摘されている。

惜牡丹花二首

惆悵階前紅牡丹

晚來唯有兩枝殘

明朝風起應吹盡

夜惜衰紅一把火

^{注19}

傍線部分が千載佳句にとられている。詩句の趣意は、明朝、風が起これば、牡丹は吹き尽くされるだろう、だから花を惜しみ、今夜火をとって見るといふものである。なるほど花が散ろうから「火影に見たい」「火にあててみたい」と詠む40番、42番との関連が首肯される。しかしながら「燈」ならぬ「火」を「把りて」花の側に行き、実際に明かりで照らし出して見た『白氏文集』の詩興は、「燈前思花」とは自ずから違うだろう。

句題和歌であれば、もとの漢籍に題の趣意は明らかであるが、

新作の題意はどう考えれば良いだろうか。この題は、大きくは「燈前」と「思花」からなるが、そもそも「燈の前に」とある歌題は平安中期には見当たらず、次の詞書が比較的近い形である。^{注20}

○『拾遺和歌集』巻第一六 雑春

清慎公家のさぶらひに、灯火のもとに桜の花を折りて
挿して侍けるを詠みける 兼盛弟

1050 ひのもとに咲ける桜の色見れば人の国にもあらじとぞ思
折り取った桜が室内に生けてある状況で、「灯のもと」を「日の
本」とかけ、ともしびのもとに咲いている桜は、よその国では
なく、日本のものと詠んだ歌である。題詠ではないが、そもそも
「ともしび」で照らされる「花」を詠む歌は、拾遺集のこの歌と、
次の『万葉集』4087番のみが確認できる。

○『万葉集』巻第十八

同じ月の九日、諸僚、少目秦伊美吉石竹の館に会して
飲宴しき。時に、主人百合の花縵三枚を造り、豆器に
疊ね置き賓客に捧げ贈りき。各この縵を賦して作りし
三首（のうち）

4087 灯火（等毛之火）の光に見ゆるさ百合花ゆりも逢はむと思
ひそめてき

右の一首、介内蔵伊美吉繩麻呂

いづれも室内の燈の前に折り取った花があり、それを見て詠む
詠物歌である。燈は、円形の台に柱をたて受け皿に油^{あぶら}をのせ、
燈芯を浸して火をつける照明具をいう。^{注21}「大殿油」とも呼ばれる室
内照明器であり、外に持つて出るようなものではない。『白氏文集』
等、詩句には「燈前」という語句が確認できるが、いづれも室内
の燈台に照らされた状況を詠っている。

○『和漢朗詠集』冬夜 尊敬（橘在列）

年光自向燈前盡^{注22}
客思唯從枕上生

○『菅家文草』三〇九

獨吟

牀寒枕冷到明遲
更起燈前獨詠詩

詩興變來爲感興^一

關身万事自然悲^{注23}

『和漢朗詠集』の詩について『新編日本古典文学全集』は、燃
え尽きようとする燈の前で、今年の残り少ない時間が尽きようと
している、その灯りを見てみると、二度と戻らない時の流れを旅
する人生というものの旅愁が、枕のあたりからわき起こってく

る、とする。『菅家文章』は「冬夜九詠」の一篇で、寒い夜に目覚めて燈前で詩をよむうちに、「詩興」が「感興」を誘い、自身に関わるすべてに感慨がおこって、自ずと悲しくなると詠う。このように漢詩には、室内の「燈前」で思いにふける作例が見いだされる。

一方、「花を思ふ」という歌題については、平安中期に多くの作例を確認できる。

○『大江嘉言集』

あめのうちに花をおもふ

11 春の夜のあけもはてなばいでてみむこよひの雨に花咲きぬらん

春雨花をおもふ

21 はるのよのあければとくみむつれと桜もよほす雨のふるかな

○『源道濟集』

同殿にて。思「野花」^{トイ}題を、

217 秋の野は行きては見ねと思ひやる心のうちに花ぞ咲きける

「花を思ふ」は、傍線部分の表現に顕著なように、山や野にある花、または雨中の花を想像して詠む、花を思う心を詠む歌である。特に道濟が、花を思うゆえに「心のうちに花ぞ咲きける」と、

想像の世界に咲く花を歌っているのが注目される。また、「花を思ふ」は花を思いやる心を題意とするためか、「夜、花を思ふ」という題の作例も多い。

○『続古今和歌集』春下

雨夜思花といふことをうへのをのこどもつかうまつりけるついで

一条院御歌^{注24}

154 くらきよのあめにたぐひてちるはなをはるのみぞれとおも

ひけるかな

○『実方集』

春の闇の花を思ふといふ題を、よみける^{注25}

316 春の夜の闇に心のまどへども残れる花をいかゞおもはぬ

○『能因集』^{注26}

夜思桜花心二首

54 さくら咲春は夜だになかりせば夢にも物はおもはざらまし

55 夜の^{注27}ほども散りや果つらん桜花月ならましかばおきてみ

てまし

* 54番は初句「桜さへ」という形で他出（『後拾遺和歌集』

98番）

一条院の歌をのぞき、いずれも闇の中の花を思いやる歌である。

また雨中散る桜をみぞれに見立てた一条院の歌も、桜は見えないはずで、想像裡の落花を見立てた、観念的な歌である。

『能因集』では、桜の咲く春は夜がなければ夢のうちにもの思いにふけることはないのに、夜のうちに散ってしまう花を月なら起きて見ていられるのに、と詠む。

さらに、「夜思瞿麦」という題で、三人が同時に詠んだらしい歌も残されている。

○『源道済集』

夜思瞿麦

214 夜のほどにさきやしぬらむとこ夏のはなのさかりはいこ

そねられね

○『大江嘉言集』

夜、とこなつをおもふ

153 あけぬれば色色にあるとこなつによるはにしきのはにぞ有りける

○『能因集』

雨の夜、常夏をおもふ心、道済が家にて人々よ

みにに

20 いかならむ今宵の雨に常夏の今朝だに露のおもりげなりつる

其夜人々以此歌爲第一矣

「夜」と「とこ（床）」の縁で、「常夏（瞿麦）」が組み合わせられたもので、部屋の内で、外の常夏のさまに思いを馳せる歌である。

このように「夜思花」の題意には、夜、闇の中の桜は見られないことが前提としてある。夜のうちに散ってしまうだろう、あるいはいま散っている、見えない花を思つて詠む題なのである。

照明技術の未発達なこのころ、屋外の夜は現代では想像の及ばない漆黒の闇であつたに違いない。外の明かりといえは月光がたよりであつた。和泉式部集314番には次の歌がある。

314 花にあかで今日も暮れなば水の面に浮かべる月をかくこそ

は見ぬ

「花」はこの場合桜かどうかかわからないが、飽かずに花を眺めているうちに、暮れてしまったので、水面に映る月影の花を見るように見ようという意である。月の光は池に映るが、花は見るこ

とが出来ない。

月光にまぎれる白梅が詠われ（古今集巻第一春歌上40躬恒「月夜にはそれとも見えず梅花香をたづねてぞしるべかりける」）、「月のおもしろかりける夜、はなを見て」詠んだ歌もある（後撰集巻第三春下103「あたら夜の月と花とをおなじくはあはれ知れ覽人に

見せばや」。しかし『四条宮下野集』^註に、「月のあかきほどに」清涼殿の桜を「花見せむ」と折らせて「一ながき夜のひかりのなかりせば雲居の花をいかで折らまし」と詠んでいるのを見ると、月明かりは花を折るためのもので、花自体は室内で活けて楽しんだようである。次の『道明阿闍梨集』では、「花を思ふ」題で月光に照らされる桜が詠まれているが、これも月光のもとに桜を鑑賞して詠うものではない。

○『道明阿闍梨集』

月おぼろにて花を思ふといふ題を

58 ちりぬめる花のにほひも見るべきをあなおぼつかな夜半の

月かけ

春の夜花をおもふといふ心を

80 かきくもる月の光もなけかれす花のかけこそみまほしけれ

月前に花をおもふといふ題を、花山院よませ給ひしに

222 春の夜は月みる空もなかりけり花のうへのみおもひやられ

て

58 番はおぼろな月光ゆえ散る桜が見えない嘆きを歌う。80 番は、月の光が翳っても嘆きはしない、翳った花のおぼろな様子こそが見たいと歌う。柏木由夫氏は「月光が翳り、花は見えにくく輪郭

のみが判別できる状況だが、それによって題の『花をおもふ』という想像を重んじたことが生かされている」「翳った花の姿に幻想的な美を見出している」とする。また222 番は、花が心配で春は月を見ることもないという歌意で、月に照らされた桜を見た感動ではなく、「月前に」ありつつ、心の中の桜への思いをこそ歌っている。

「燈前思花」題は「夜思花」題の一類であるが、夜でなく室内の「燈前」という、新しい趣向が加わっている。この題からどのような桜への思いが詠まれているか。

四「燈の前に花を思ふ」と云ふ心 歌三首

前述したように、和泉式部は周辺の文学教養を享受しうる環境にいた。仮に和泉式部周辺のいずれかの歌会、詩会の時に「燈の前に花を思ふ」という題が、いくつかの題と共に出されたとする。その中で和泉式部は敢えてこの「燈の前」という設定の題を選んだ。三節で考察したようにこの三首は「夜思花」の流れにはあるが、それに「燈の前」という状況を加えた題の心を詠むことが、和泉式部の歌心を刺激したのではないだろうか。

この三首には起・承・転結のような展開(構成)を見て取れるのではなくだろうか。

461夜のほどに散りもこそすれ明るるまで火影に花を見るよし
もがな

起の第一首。『和泉式部集全釈』^{注5}では、次の歌を「心に置く」とする。

○『後撰和歌集』巻第二春 中

前栽に竹の中に、桜の咲きたるを見て 坂上是則

54桜花今日よく見てむ呉竹の一夜のほどに散りもこそすれ
後撰集歌では、「今日見る」はすなわち日中に見ることを意味しており、前提として「夜のほど」の桜は見られないとの飽きたらなさがある。この後撰集歌の下句の「夜」以下を上句に据えて、「一夜のほど」に散る桜を惜しむ心は同じながら、下句に日中のみならず火影に照らし夜明けまで見たいという発想を加えている。目の前の燈の明るさに、これで照らせば「夜のほど」の桜を昼と同じく見られるの^{注30}というのである。

なお、「夜のほど」を花と組み合わせた例としては和泉式部集の「181夜のほどもうしろめたなき花の上を思ひがほにて明かしつるかな」のほか、前節にみた道済、能因の歌が目につく程度で、いずれも夜見えないうちに变化する花に思いを馳せる歌である。

見えない夜の桜を、燈の火影に照らして「見るよしもがな」とするのが題に導かれた新しい発想だが、この「もがな」の根底に

は、実際には室内の燈は外に持ち出せないから、この明るさで見るのは無理な願いだというあきらめがある。日中の桜の美しさを感じるにつけ、そのまま桜を夜も目の前の燈の明るさで見たいという願望と、それはかなわないという焦燥がせめぎ合うのである。

462火にあてて見るべきものを桜花幾日もあらで散るぞ悲しき

承の第二首。諸註釈では前歌を受け「火にあてて」とするが（「文庫」「全釈」、先行和歌における用例は、ほぼ「陽にあてて」である。すなわち、亭子院女郎花合24番「をる人をみなうらめしみ歎かなてる日にあててしに置かせじ」^{注31}、『仲文集』13番「ゆふだすき袖にかけてもちかひてむゆふ日にあててみではあらじ」、和泉式部統集100番「君を思ふ心は露にあらねども日に当てつつも消えかへるかな」、いずれも「陽」である。燈（火）に桜を見るという歌のない時代に、第二首では桜は「火にあてて見るべきもの」とまで断じている。それだけ眼前の燈に照らして桜が見たい、散り初める前に少しでも長く桜を見たいという思いが深まっている。しかし燈台は携行できず、実際には明るい光では見られない。一首目の「夜のほど」の「見たい」「見られない」の渴望と焦燥を、第二首では幾日か重ねるのだが、そう幾日も重ねないうちに桜は散ってしまう。第二首の結句「悲しき」は、第一首を受けて、散る桜への愛惜ゆえにより深められた渴望と、どうしても無

理だという諦念ゆえの悲しみを表している。

463 ともしびの風にたゆたふ見るまに飽かで散りなん花をこそ

そ見れ

第三首は、前二首から大きく転じて、風の前の燈を歌う。まず目に付くのが「たゆたふ」である。「たゆたふ」は、『万葉集』には一三首あるが、古今集の508番「ゆたにたゆたに」のほかは八代集には見られない語で、和歌では波、大海、雲、風、大船、綱などとともに歌われることが多い。大きな揺らぎを想像させる語である。

いま見ている燈が風に「たゆたふ」。室内の炎の繊細なゆらめきに大きな揺らぎを感じるほどに、和泉式部の心は眼前の燈に集中している。そのため室内の炎のほのめきに、いま屋外で吹いている、一気に桜を散らすほどの風の強さを感知するのである。花を散らす風に「たゆたふ」炎を見つめるうちに、花を思つて「たゆたふ」心が重なつてゆく。

「見るまに」は、「見るにしたがつて」「見ているうちに」の意で、和泉式部集には、この歌のほかに、和泉式部自身が詠んだ五首（重出歌を含まず）がある。

10 見るままに下枝の梅も散りはてぬさも待ち遠に咲く桜かな
目の前で変化するまでの長い間、「じっと見つづける」自分を、和

泉式部は歌う。「見るまに」は、変化する対象に愛着し注視する深さをえぐる語なのである。さらにこの第三首の「見るまに」

は、「ゆらぐ燈を見続けるうちに」「見続ける目の前で飽き足らぬまに散る花」のように、「燈」と「花」のイメージを重ねる役割も果たしており、燈の風にたゆたう姿を見るうちに「花をこそ見れ」の結を導く。「見るまに」「見れ」が重複する形だが、こうした重複は和泉式部の歌にはしばしば見られ、軽快なリズムをなしている。例えば「214 見には見ん」「790 見には見えじ」「994 見にのみぞ見る」、「564 待つ人は待てども見えてあぢきなく待たぬ人こそまづは見えけれ」などである。

第三首の歌い出しの、屋内に吹き込む風に眼前の「ともしび」が大きく揺れるさまは、外にはもつと強く、桜を散らす風が吹いていることの暗示である。前二首には詠まれていない「風」が登場したことで、目の前で消えようとする「燈」のはかなさと、みるみるうちに散るのだらう外の「花」への思い―見たいのに見られない焦燥が引き出され、第三句「見るまに」を継ぎ目に、両者は重ねられてゆく。そして、いま風に散り舞っているだらう見えない花を、「たゆたふ」目の前の燈に見るのだ、と結ぶ。

第三首の結「花をこそ見れ」は、前二首で眼前にない花を「見るよしもがな」「見るべきものを」と、思い続けた結びともなつて

いる。ここではじめて「花を見た」のであるが、もちろん花の姿そのものを見たわけではない。ここで見たのは、愛する花をずっと「見たい」と思う心、「思花」の心が高じた結果として燈に見えた、心の中の、想像の桜である。

和泉式部には「いとへども消えぬ身ぞ憂き羨まし風の前なる宵のともし火」（和泉式部集1036番）という歌がある。「風の前なる燈」は、どんなに輝いても一瞬の風で消えてしまう。それは桜が咲き誇っても一陣の風で散ってしまうのと似ている。『燈の前に花を思ふ』と云ふ心」はこの第三首463番に集約されるのではないだろうか。二首で、すぐに散る桜を惜しみ、夜も昼も見たいという、強い気持ちを詠む。そして三首目で風に揺れる燈を見て、とうとう風に散ってしまう桜の姿を目にうかべる。燈も桜も等しくはかなく無常のものなのである。

第三首で見た桜は、燈と一体となって心に映る桜であり、消滅と隣り合わせの瞬き、まさにいのちの輝きそのものの桜なのだ。思いの深まってゆく果てに、闇に瞬く光に命のほのめきを「見る」。そう歌い上げる言語感覚と感性には、1162もの思へば沢の蜚もわが身よりあくがれ出づる魂かとぞ見る」（後拾遺集卷第二十雑六）にも共通するものがあるのではなからうか。

五 まとめ

『燈の前で花を思う』という題は、新作の漢字四字題と見られるが、管見の限り他の歌集には確認できず、当時のいづれの歌会、歌合で出された題かも不明である。ただし、「夜、花を思ふ」は、夜のうちの見えない花への愛着を詠む題として、既に多くの作例が見られた。和泉式部はこれら「夜思花」の発想を踏まえつつも「燈前思花」題の独自性に応え、室内の燈の前で屋外の桜を燈に「見る」と思う心を詠んでゆく。

結局「燈の前」の設定が重要なのである。なぜなら、闇のなかの瞬きである「燈」は、消滅無常を強く意識させるからである。また当時の油の貴重さゆえか、牡丹を「火を把りて」（松明などを手に取って）夜見ることはできても、大きな花木である桜を全面に照らして見るのは不可能だったとみえ、夜桜を鑑賞する歌が平安時代には存在しない。つまり目の前の燈の明るさで「見るよしもがな」「見るべきものを」と願えば願うほどに、そうできない焦燥が掻き立てられることになる。もの狂おしいまでの桜への愛着と、いくら愛着しても儚く消えてしまう（散ってしまう）無常さを、「燈の前」は思い知らせる。その思いの深まりを第一首（起）、第二首（承）と丁寧に歌うことで、第三首の「燈」「花」双方の儚

さを引き出す「風」(転)に大きく揺れる心が導かれ、その思いの深さが「花」の姿を見る「結」へと繋がってゆく。ここには「燈の前」を前提として三首を構成しようとした意識があると考えられる。

注

注1 井上宗雄『心を詠める』について―後拾遺・金葉集にみられる詞書の一傾向(立教大学日本文学35号) 一九七六・二

注2 拙稿「桜」歌の系譜―古今集から後拾遺集へ(東京女子大学紀要『論集』第六十六卷三号 二〇一六・三)

注3 平安朝漢文学研究会編「平安朝漢文学総合索引」(吉川弘文館 一九八七)

注4 「三月三日紀師匠曲水宴和歌」(群書類従・第十一輯和歌部 續群書類従完成會 昭34訂正三版)

注5 小沢正夫「古今集の世界」(増補版 塙書房 昭和51)

橋本不美男「王朝和歌史の研究」(笠間書院 昭和47) 浅田徹「題詠と表現―金葉集の時代」(秋山虔編「平安文学史論考」 武蔵野書院 二〇〇九)

注6 久保木寿子「和泉式部の詠歌環境―その始発期」(『国文学研究』七十一集 昭和五五(早稲田大学国文学科))

注7 一例をあげれば和泉式部集187番〜198番(重出歌851番〜864番)の「権中納言の屏風のうた」の歌は、「大江嘉言集」122番〜132番(屏風

の歌)、「源道済集」87番〜98番(権中納言との、屏風の歌)と、同じ図柄で詠んだ歌と考えられている。

注8 桑原博史「源道済集全釈」(風間書房 一九八七)

注9 春秋会「源兼澄集全釈」(風間書房 平成3)

注10 平安文学輪読会編「長能集注釈」(塙書房 平成元)

注11 注8及び福井迪子「大江嘉言考」(二条文壇の研究) 桜楓社 昭和62)

注12 「愛水多棹舟 惜花不掃地」

「白氏文集」卷五二・二二八九・「日長」(新釈漢文大系第105巻 白氏文集九) (明治書院 平成17)

注13 「類聚句題抄」には、慶滋保胤が「惜花不掃地」を題として作った詩がある。本間洋一氏は和泉式部のこの歌を「惜花不掃地」の和歌詠の例にあげている。

本間洋一「類聚句題抄注釈」(和泉書院 二〇一二)

注14 「暮春陪都督大王遊覽法興院同賦庭花依旧開」

(今浜通隆注釈「本朝麗藻全注釈」 新典社 平成5)

注15 「長能集」注10に同じ

三保サト子編「道命阿闍梨集 本文と索引」(和泉書院 昭和55)

注16 和泉式部集 868〜876。重出歌125、132〜149)

注17 瞿麦会編「平安和歌歌題索引」一九九四増補版

注18 小松登美「和泉式部と漢学」(『和泉式部の研究』(笠間書院 一九九五) 近藤みゆき「和泉式部と漢詩文」(『古代後期和歌文学の研究』

二〇〇五

注 19 「白氏文集（三）」新釈漢文大系第99巻（明治書院 一九八八）

注 20 注18及び各私家集目録

注 21 「燈火器」（日本の美術）177号（至文堂 一九八一）

「平安時代史事典」資料索引編（角川書店 一九九四）

注 22 菅野禮行校注・訳「和漢朗詠集」（新編日本古典文学全集19 講談社 一九九九）

注 23 川口久雄著「菅家文章菅家後集」（日本古典文学大系72（岩波書店 昭和41）

注 24 「列聖全集」御製集第一巻一条天皇御製（列聖全集編纂會 大11）採録で確認

注 25 犬養廉、後藤祥子、平野由紀子校注『平安私家集』（新日本古典文学大系28 岩波書店 一九九四）

注 26 注25に同じ

注 27 注25に同じ

注 28 柏木由夫「道命阿闍梨集」注釈（三）（大妻女子大学紀要・文系・第四十五号平成25年3月）

注 29 佐伯梅友・村上治・小松登美著「和泉式部集全釈」正集篇（笠間書院 二〇一二）

注 30 「宇津保物語」祭の使「夜にいりて、灯籠間ごとにつけ、灯台間なく立て、続松ともし渡しつ」の結果「昼よりもあかく照りみちたるほかげにえたる姿」という記述がある。中野幸一校注・訳「うつほ物

語①（「新編日本古典文学全集14」小学館 一九九九）

注 31 『新編日本古典文学全集 11 古今和歌集』（小学館 一九九四）収載

*和泉式部集は、次の本文を使用した。

『和泉式部集・和泉式部統集』清水文雄校注（岩波文庫 一九八三）略称「文庫」

*私家集の『大江嘉言集』、『仲文集』は「新編国歌大観（古典ライブラリー）」を本文とする。

（かねこ のりこ 博士後期課程在籍）

